サービスラーニングを通しての学び

社会福祉学部社会福祉学科２年　山上　実沙季
活動先：NPO 法人　ひだまり
ゼミ：野尻　紀恵　先生

私は住吉町にある特定非営利活動法人ひだまりで活動させていただいた。ひだまりは介護保険事業(通所介護・介護予防通所介護・居宅介護支援・介護予防居宅介護支援)、NPO自主事業(地域交流支援・喫茶ひだまり・保育サービス・デイサービス・訪問介護)を行っており、その中の通所介護(デイサービス)で６日間活動した。通所介護の利用者さんは、軽度・重度問わず認知症の方が多く、また聴覚障害の方も利用してくださっている。

サービスラーニングを通して気づき学んだことは３点ある。それはコミュニケーションの取り方、企画をすることの難しさ、同じ活動先のメンバーと連携することの大切さだ。

１点目のコミュニケーションの取り方については、実際に活動を通し、利用者さんと関わることで学んだのである。私は高校の時から高齢者の方と関わりを持っていたため、あまり不安がなく活動当日を迎えることができたのだが、緊張もありなかなかコミュニケーションをとることができなかった。緊張もあったためか「自分から話題提供をしなきゃいけない」「沈黙はよくない」と考えてしまい、「話かけなくては」と焦っていた部分があった。職員の方に「話をすることだけがコミュニケーションではない。利用者さんの傍に寄り添い話を聞いてあげることも大切」と言われたのである。これを言われた時に、利用者さんと関わっていた時の利用者さんの表情があまりよくないことに気づいたのだ。指摘をいただいてから関わり方を私から話題提供するだけではなく、利用者さんの傍に寄り添い話を聴くという形に変えてみると、利用者さんの表情もよくなり、適度なあいづちを入れながら話を聴くこともコミュニケーションであると気づかされたのだ。

２点目の企画をすることの難しさについては、買い物企画を通して学んだのである。私たちは学生企画として買い物支援とフルーツポンチ作りを行わせていただいた。企画段階から実施までは何回もメンバーで話合ったり、職員の方に指摘をもらったりした。企画をして実施をするとなると、当日を楽しみに待ってくれている利用者さんがいる。当日利用者さんの状態が変化する可能性もあるため、緊急のことも想定して企画をしなければならないと学んだ。買い物企画ではひだまりの近くのパワードームに行ったのだが、

下見に2回も連れて行っていただき、トイレの位置や駐車スペース、当日は天候が晴れであるか雨であるかなど細かいところまで考え、ある程度の問題を想定し計画を立てた。だが私たちが考えていたものでは至らない点もあり、職員の方との連携も重要であると学ぶことができた。

3点目の同じ活動先のメンバーと連携する大切さについては、活動先に行くと決まった時から終了するまでに学ぶことができた。サービスラーニングを行うにあたり、同じ活動先のメンバーと一緒に事前学習や企画、実施、振り返りを行ってきた。事前学習では活動先の理念やどのようなサービスを提供しているかなどを知った上で、利用者さんはどのような症状の人がいるのか、活動先がある地域の福祉サービスは何かを、活動するメンバー全員が知ることで、学生企画や実施に繋がるということを学んだ。企画段階では、どのような企画にしたいのかメンバーで話合って決めた。1人だけがしたいと思った企画では、利用者さんに楽しんでもらうことができない。みんなが納得した上でさらに利用者さんの状況をしっかりと把握した上で、メンバーが連携して考えていかなければならないということに気づいた。また学生企画をするとなった時、メンバーは内容を理解していたのだが、職員の方に伝えるのが遅くなってしまったことがあった。この際、メンバーだけの連携だけでなく、職員の方との連携も大切であり、みんなで情報共有をすることが重要であると学んだ。

このサービスラーニングの活動を通して、軽度や重度に関わらず認知症の方と接し、私たちが以前から理解していた認知症と関わってみてから考える認知症とは大きく違った。活動で得たこのような結果から、研究テーマを「認知症に対する一般的なイメージと実際の関わりから見えるもの」と設定し研究を行った。以前は認知症という症状で思い浮かぶものは、徘徊や異食、ひどい物忘れなどであった。実際に関わってみると、認知症の症状というものはあまり見られず、一般的な高齢者というイメージが強かった。学生企画の買い物企画で、店内を一緒に回った際「これ孫に買っていく」と話してくれた利用者さんや、「これはあそこに置く」と選んでくれる利用者さんなど家族のことを考えたり、自分の家を想像したりする利用者さんの姿が見られた。このようなこともあり、私たちが認知症というものを正しく理解していなかったと気づかされた。私たちも実際に関わってみて、認知症にはさまざまな症状があり、その人の周囲の環境も影響しているということがわかったが、地域で生活している人たちは認知症というものを理解しているのだろうか。現在の日本は少子高齢化であり、今後高齢者の増加とともに、認知症の方も増加することが予想される。私たちの以前のような考え方で認知症の方と接していたら、改善できる症状も改善できなくなる。これからは地域に住む人や認知症の方を持つ家族などが、認知症の正しい知識を身につけ接していかなければならないと考える。

このサービスラーニングを通し、考え気づき学んだことはたくさんあった。この経験をここで終わらせず、今後も地域に出てて考え、しっかりと役立てていきたい。